論　文　ニダバ (*Nidaba*) 41(2012), 117-126

フランス語における語順構造シフトの通時的方向性

―語順類型論的観点から見えてくるもの―

今田良信

0．はじめに

本稿は，これまで今田(2009)，(2010a)，(2010b)，(2012b：刊行予定）において，古フランス語と現代フランス語の間に見られる「言語構造の変換」の事例として筆者が挙げたもののうちで語順に関するものと，それら以外で，語順類型論の各主要語順パラメーターにおいて扱われる構成要素の相対的順序に着目し，古フランス語から現代フランス語への語順構造シフトの通時的方向性，およびフランス語語順構造の背後で働いていると考えられるメカニズムを明らかにすることを目的としている。

この問題は，異なる角度から，大きく２つに分けて考えるとができるように思われる。

１つは，（Ⅰ）平叙文と疑問文の構造上の変換を同じ語順構造の仕組みの中に含めて考えた場合に，全体として，その仕組みがどのようにシフトしたのかという観点から捉えるものであり，具体的には，フランス語の節内基本語順を構成する３要素であるＳ，Ｖ，Ｃ〔略号は，Ｓ：主語，Ｖ：動詞，Ｃ：補語（直接目的～，間接目的～，状況～を含む）〕のうち，ＳとＶの語順構造シフトに関する問題である。

もう１つは，（Ⅱ）（Ⅰ）と同じくフランス語の用語による節内基本語順の構成要素で言えばＶとＣの関係，一般的な語順類型論の構成要素で言えばＶとＯ〔略号は，Ｏ：目的語〕の関係に代表される語順構造シフトに関するものである。すなわち，もう少し詳しく言えば，W. P. Lehmann は「ＶＯ型」／「ＯＶ型」[1]，T. Vennemann，他は「主要部－従属部(head-dependent)型」／「従属部－主要部（dependent-head）型」など[2]と呼んでいるが，文字通り動詞／目的語（Ｖ／Ｏ）の相対的順序を含む節内基本語順だけでなく，それ以外の各主要語順パラメーター〔具体的には，名詞／形容詞（Ｎ／Ａ），名詞／関係節（Ｎ／Rel），名詞／属格（Ｎ／Ｇ），接置詞／名詞（句）（Ap／N）[3]の相対的順序〕[4]における構成要素どうしの関係も１つの仕組みの中に含めて考えた場合に，その語順構造全体のシフトがどのようになっているのかという観点から捉える問題である。

それは，これら２つの語順構造の仕組みの働きとか，機能上の価値というものが，上述の「語順構造の背後で働いていると考えられるメカニズム」とか「語順構造シフトの通時的方向性」にとって等価ではないと考えられるからである。しかし，この両者を別々に分

けて考えることだけでなく，説明が十分明確になされてはいないと思われるのに，（Ⅰ）に対する（Ⅱ）の優先性についてまでも支持する主張が見られる。例えば，Perret(1998), p.117 によれば，次のように述べられている。

"Selon Ch. Marchello-Nizia, l'évolution du français se caractérise moins par la fixité de la place du sujet qui, dans certaines conditions, peut être inversé que par l'obligation de respecter l'ordre verbe + objet qui commence à se généraliser dès le XⅡe siècle."

「クリスティアーヌ・マルシェロ＝ニズィアによれば，フランス語の変遷を特徴づけるのは，条件によって倒置しうる主語の位置の固定化よりも，12世紀から一般化し始める〈動詞＋目的語〉の語順を守る義務の方である。」〔拙訳〕

また，その Marchello-Nizia(1995), p.110 には，"Dissocier SV et OV; primat de OV" 「ＳＶとＯＶを切り離すこと；ＯＶの優位性」という見出しの下に，次のように指摘されている。

"De cette dissymétrie dans l'évolution de l'objet et du sujet, il faut en tirer la conséquence au plan méthodologique. Comme le proposent W. Lehmann (1974), et pour le français Combettes(1988), il convient de dissocier dans l'étude de l'ordre des mots la question du sujet et celle de l'objet, et de partir non pas de SV, mais de OV."

「目的語と主語の〔文中での位置の（補足筆者）〕変遷におけるこの不均整から，方法論上の結果を引き出さなければならない。ウィンフレッド・レーマン(1974)や，フランス語については，コンベット(1988)が提案しているように，語順研究においては，主語の問題と目的語の問題を切り離し，ＳＶではなくＯＶから始めることが望ましい。」〔拙訳〕

さらに，同書，p.113 には，

"L'évolution du français se caractérise donc par une avancée des traits propres au《VO》;"

「フランス語の変遷を特徴づけるのは，従って，《ＶＯ》に固有の諸特徴が進んで行ったことである。」〔拙訳〕

と述べられている。

これらの主張の妥当性を，俄に決することはできない。理由は，そもそもＳ／Ｖに対するＶ／Ｏの「優位性」なるものの基準が，それほど説得力をもって示されているとは思われないからである。先にも述べたように，Ｓ／Ｖの関係性とＶ／Ｏの関係性を同等に扱えないことは筆者も理解しているし，語順類型論においてＶ／Ｏの関係性が重要視され[5]，Ｓ／Ｖの関係性はあまり問題にされていないことも分かっている。しかしながら，研究の順序に関してであれ，言語の特徴づけに関してであれ，そのことがそのままＳ／Ｖに対するＶ／Ｏの「優先性」や「優位性」に繋がるとは思われない。管見によれば，これまでの拙論の考察の結果，フランス語の語順構造において，Ｓ／ＶにはＳ／Ｖの重要性があるように思われる。特に，他のロマンス諸語と対比した場合，その重要度は特に際立っているように思われる。そこで，本稿では先ず，これら２つのうち，（Ⅱ）の観点からフランス語の語順構造シフトについて考察してみたい。

１．語順構造の背後で働いていると考えられるメカニズムについて

前節の目的を果たす前に，語順構造の背後で働いていると考えられるメカニズムについて理解し易くするため，具体的な事例を挙げて説明しておきたい。

安藤(1987)，p.10によれば，英語と日本語の疑問詞の位置について，「英語の疑問詞は必ず文頭に移動させなければならないが，日本語では，動詞の左側にあるかぎり，どこに生じてもさしつかえない。」と述べられている。例えば，次の通りである〔例文後の略号は，文の構成要素の相対的順序を示すものであり，以下同様。Ｋ：疑問詞，＊：非文〕。

(1a)　何を太郎は買ったのですか。　　ＫＳＶ
(1b)　太郎は何を買ったのですか。　　ＳＫＶ
(1c)　*太郎は買ったのですか何を。　　*ＳＶＫ

また，ロマンス諸語のイタリア語について，古浦(2008)，p.299 には，「〔現代（補足筆者）〕イタリア語では疑問詞は文頭に置かれる。」とある。それでは，現代フランス語ではどうかと言えば，イタリア語より多様で複雑であり，例えば，次の通りである。(2a)～(2d)は，疑問代名詞の事例で，概念的意味はいずれも(2a)と共通している。また，(2a')～(2d')は，疑問副詞の事例で，概念的意味はいずれも(2a')と共通している。間接疑問タイプのＫＳＶ語順の構文は，疑問代名詞（＝(2d)）については容認されず，疑問副詞についてのみ容認される場合がある。なお，疑問文の抑揚の説明については省略する[6]。

ここで，もし「疑問詞が文頭に置かれるかどうか。」というパラメーターを立てれば，「日本語でもフランス語でも疑問詞は必ずしも文頭に置かれるとは限らない。」ということになるであろう。しかし，巨視的に見ればそのように同様に見えてしまうが，微視的に見れば，両者には大きな基本的相違が見られる。

(2a) Paul mange quoi? ＳＶＫ（平叙疑問タイプ）
「ポールは何を食べるんだろう。」
(2a') Ton cousin habite où? ＳＶＫ（平叙疑問タイプ）
「君の従兄弟はどこに住んでいるの。」
(2b) Qu'est-ce que Paul mange? ＫＳＶ（強調疑問タイプ）
(2b') Où est-ce que ton cousin habite? ＫＳＶ（強調疑問タイプ）
(2c) Que mange Paul? ＫＶＳ（倒置疑問タイプ）
(2c') Où habite ton cousin? ＫＶＳ（倒置疑問タイプ）
(2d) *Que Paul mange? *ＫＳＶ（間接疑問タイプ）
(2d') Où ton cousin habite? ＫＳＶ（間接疑問タイプ）

すなわち，日本語では疑問詞が動詞の右側にあると容認されないのに対し，フランス語では動詞の右側にあっても（＝(2a),(2a')）容認されるという点である。そこで，この違いは何に起因するのかを考えてみると，部分（＝疑問詞）疑問文を作る際の主題化による疑問詞の（文頭への）左方転移に関しては，日本語，フランス語両言語に限らず，それ以外の言語（例えば，英語，イタリア語）でも許されるので別にするとして，その背後には，日仏両言語の平叙文における，「wh- 化可能構成要素」（疑問詞化できる文構成要素，例えば，名詞句，特定の文副詞句）の動詞に対する位置，さらに突き詰めて言えば，基本語順というものが制約として関係しているのではないかということが見えてくる。平叙文において，動詞の位置との関係で，「疑問詞化される前の要素」である名詞句や特定の文副詞句が来る位置には疑問詞も来ることができるが，その要素が来るはずの無い位置には疑問詞も来ることができないということである。言い換えれば，基本語順において，動詞に対してその要素が立てない位置（例えば，日本語における動詞の右側）には，疑問詞も決して立てないということになる。これが語順構造の背後で働いていると考えられるメカニズムの１例である。以上をまとめたものが，(3)と(4)である〔Ｖには網掛けを施した。ただし，フランス語の疑問代名詞の場合には，間接疑問タイプのＫＳＶのみ非文になる〕。

	〈基本語順〉		〈部分（＝疑問詞）疑問文の語順〉	
(3)	日本語：ＳＯ**Ｖ**	⇨	ＫがＶの左側：ＫＳ**Ｖ** ＳＫ**Ｖ**	ＫがＶの右側：＊Ｓ**Ｖ**Ｋ
(4)	フランス語：Ｓ**Ｖ**Ｏ	⇨	ＫがＶの左側：ＫＳ**Ｖ** Ｋ**Ｖ**Ｓ	ＫがＶの右側：Ｓ**Ｖ**Ｋ

２．古フランス語と現代フランス語における主要語順パラメーター値の異同について

ここでは，０．で示した（Ⅱ）の観点，すなわち，古フランス語から現代フランス語へ

の語順構造シフトの通時的方向性を明らかにするために，語順類型論における各主要語順パラメーターから見た場合，古フランス語および現代フランス語が，それぞれのパラメーターに関してどのような値を取るのか，また両者間にはどのような異同があるのかを見てみることにしたい。

各主要語順パラメーターは，具体的には，0．の（Ⅱ）に挙げたものであるが，それらのパラメーター値を，〈従属部（D）－主要部（H）（＝OV）型〉と〈主要部（H）－従属部（D）（＝VO）型〉に分けて，略号で示すと次の通りである〔なお，⊃（あるいは⊂）：数学の集合の記号で，全体集合Aと部分集合Bの関係を，A⊃BあるいはB⊂Aのように表わす。下線部筆者〕。

	〈D－H（＝OV）型〉	〈H－D（＝VO）型〉
(5)	OV（⊃S<u>OV</u>，<u>OV</u>S，<u>O</u>S<u>V</u>）	VO（⊃S<u>VO</u>，<u>V</u>S<u>O</u>，<u>VO</u>S）
(6)	AN	NA
(7)	RelN	NRel
(8)	GN	NG
(9)	NAp	ApN

そこで，これらの各主要語順パラメーターについて，古フランス語および現代フランス語におけるパラメーター値を調べ，両者間におけるパラメーター値の異同を見てゆくことにする。

2．1．節内基本語順における動詞／目的語（V／O）の相対的順序

先ず，(5) の節内基本語順に関しては，古フランス語はSVO語順とされているので[7]，H－D（＝VO）型である。また，現代フランス語も同じくSVO語順であるので，H－D（＝VO）型ということになる。従って，両者間のパラメーター値は変化していないことになるので，それを図示すると，〔図1〕の通りである〔なお，→：矢印の左右で型に違いが無いことを示す〕。

〔図1〕

《古フランス語》		《現代フランス語》
H－D（＝VO）型	→	H－D（＝VO）型
※節内基本語順はSVO語順		※節内基本語順はSVO語順
動詞第2位が原則		SVの定置化が原則

2．2．名詞／形容詞（N／A）の相対的順序

次に，(6) の名詞／形容詞（N／A）の相対的順序に関しては，古フランス語ではAN語順が一般的であるとされており[8]，D－H（＝OV）型ということになる。一方，現代

フランス語はＮＡ語順が基本であるので，Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型である[9]。従って，両者間のパラメーター値のシフトは，〔図２〕の通りである〔なお，⇨：矢印の左右で型に違いが有ることを示す〕。

〔図２〕　《古フランス語》　　《現代フランス語》
Ｄ－Ｈ（＝ＯＶ）型　⇨　Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型
※ＡＮ語順　※ＮＡ語順

２．３．名詞／関係節（Ｎ／Ｒel）の相対的順序

３つめに，(7) の名詞／関係節（Ｎ／Ｒel）の相対的順序に関しては，古フランス語も現代フランス語も，右枝分かれ構造の言語であり[10]，いずれもＮＲel語順であるので，両者ともＨ－Ｄ（＝ＶＯ）型ということになり，両者間のパラメーター値は変化していないので，〔図３〕の通りとなる。

〔図３〕　《古フランス語》　　《現代フランス語》
Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型　→　Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型
※ＮＲel語順　※ＮＲel語順

２．４．名詞／属格（Ｎ／Ｇ）の相対的順序

４つめに，(8) の名詞／属格（Ｎ／Ｇ）の相対的順序に関しては，古フランス語の最古期には，ラテン語の語順であるＧＮ語順をまだ取っていたようである。Chaurand(1987[5]), p.18によれば，次のように指摘されている。

"Enfin, le plus ancien français se caractérise par un ordre des mots demeuré différent de celui qui sera en usage dans les autres états de langue. Dans les plus anciens textes, le déterminant, qu'il soit nom ou adjectif, se place volontiers devant le déterminé, l'article, quand il est employé, précédant l'ensemble; ainsi lit-on dans nos premiers textes: *pro Deo amur*, pour l'amour de Dieu, *li Deo inimi*, les ennemis de Dieu;"

「最後に，最古フランス語を特徴づけるのは，その後他の言語状態において用いられることになるものとはまだ異なる語順である。最古のテクストでは，限定詞〔＝Ｇ（補足筆者）〕は，名詞であれ形容詞であれ，好んで被限定詞〔＝Ｎ（補足筆者）〕の前に置かれ，冠詞は，それが用いられる場合，〔名詞句（補足筆者）〕全体に先行した。かくして初期のテクストには次のようなものが見られる：pro Deo amur「神への愛のために」，li Deo inimi「神の敵」」〔拙訳〕

しかし，その後それほど期間を経ないうちに，ＮＧ語順が定着し，古フランス語の語順の特徴となったようである。古フランス語の統語法について触れられた同書，p.34には，次のように述べられている[11]。

"Un ordre des mots tend à se fixer aussi dans le groupe *détérminé-déterminant*; un cas régime non prépositionnel peut alors suffire quand le second désigne une personne, ex. *la cort le roi,*"

「語順はまた「被限定詞－限定詞」〔＝ＮＧ（補足筆者）〕という語群に定着する傾向がある。２番目の要素〔＝Ｇ（補足筆者）〕が人を指す場合には，前置詞のない被制格のみで十分である」〔拙訳〕

そこで，古フランス語全体としてはＮＧ語順と考えて，一応Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型としておきたい。また，現代フランス語もＮＧ語順が基本であるので[12]，Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型となる。従って，両者間のパラメーター値は変化していないことになるので，それを図示すると，〔図４〕の通りである。

〔図４〕

《古フランス語》		《現代フランス語》
Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型	→	Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型
※最古フランス語では		※ＮＧ語順が基本
ＧＮ語順でその後		
ＮＧ語順が定着		

２．５．名詞（句）／接置詞（Ｎ／Ａp)の相対的順序

最後に，(9) の名詞（句）／接置詞（Ｎ／Ａp)の相対的順序に関しては，古フランス語も現代フランス語も，基本的に前置詞が用いられるので[13]，いずれもＡpＮ語順であるので，両者ともＨ－Ｄ（＝ＶＯ）型ということになり，両者間のパラメーター値は変化していないので，それを図示すると，〔図５〕の通りとなる。

〔図５〕

《古フランス語》		《現代フランス語》
Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型	→	Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型
※ＡpＮ語順		※ＡpＮ語順

３．古フランス語から現代フランス語への語順構造シフトの通時的方向性

２．で得られた，古フランス語および現代フランス語における各主要語順パラメーター値の異同についてまとめたものが〔図６〕である。ここでは，この結果に基づいて，古フ

ランス語から現代フランス語への語順構造シフトの通時的方向性を読み取ってみたい。

〔図６〕

		《古フランス語》		《現代フランス語》
Ｖ／Ｏの相対的順序	：	Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型	→	Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型
Ｎ／Ａの相対的順序	：	Ｄ－Ｈ（＝ＯＶ）型	⇨	Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型
Ｎ／Ｒｅｌの相対的順序	：	Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型	→	Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型
Ｎ／Ｇの相対的順序	：	Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型	→	Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型
Ａｐ／Ｎの相対的順序	：	Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型	→	Ｈ－Ｄ（＝ＶＯ）型

その前に，ここに挙げられた主要語順パラメーターについて確認しておくべき点がある。それは，各パラメーターの大部分が互いに論理的には独立していることである。この点について，Comrie(1989[2])，p.92 には，「たとえば，ある言語の基本語順がＳＯＶであることがＮＡよりもＡＮの語順と多少とも相関しているというようなことは，先験的に予測できないからである。また，ＡＮとＲｅｌＮ（どちらも種類は違うが限定的構造体）の語順のように，そこにある種の相関関係が先験的に予見できる場合でも，たとえば英語では，ＡＮだがＮＲｅｌというように，この相関関係を持たない言語も少なからず存在するので，このような相関関係は決して必然的なものでないことが分かる。」〔松本克己・山本秀樹訳〕と述べられている。さらに，同書，p.99では，ある主要語順パラメーターの値が他の主要語順パラメーターの値に対する有効な予測項になるとは言っても，それがすべてのパラメーターにまで一般化できるものではなく，中には他のパラメーターと有効な相関性をまったく示さないものもあるという Greenberg(1966b) の主張を取り上げ，「形容詞の順序がそのよい例で，ある言語で形容詞が，通常，名詞の前に来るか後に来るかを知っても，そこから他の語順パラメーターの値については事実上何も予測できない。」〔松本克己・山本秀樹訳〕と述べている。

しかし，以上のような原則を踏まえながらも，〔図６〕に示した各主要語順パラメーターの値の通時的な動きを見ると，フランス語の場合，古フランス語の時期までに既に大半のパラメーター値が揃って動きだしている方向であるＨ－Ｄ（＝ＶＯ）型へと向かう方向性に合わせるかのように，他のパラメーターの値も，時期の早い遅いの差はありながら，推移している実態が浮かび上がって来る。上掲書，p.92の引用箇所の直後にも「しかし，それにもかかわらず，このさまざまなパラメーターの間には，統計的に有意味な多くの相関関係が導き出されていることが明らかになっている。」〔松本克己・山本秀樹訳〕とも指摘されている。

例えば，Ｖ／Ｏの相対的順序については，ラテン語ではＳＯＶ語順でＤ－Ｈ（＝ＯＶ）型であったものが，古フランス語では既にＳＶＯ語順のＨ－Ｄ（＝ＶＯ）型となっている。また，Ｎ／Ｇの相対的順序については，最古フランス語の時期にはまだＧＮ語順でＤ－Ｈ

（＝ＯＶ）型であったものが，その後，古フランス語の時期の間にＮＧ語順のＨ－Ｄ（＝ＶＯ）型に定着している。そして，Ｎ／Ａの相対的順序については，古フランス語ではＡＮ語順でＤ－Ｈ（＝ＯＶ）型であったものが，主要語順パラメーターの中で最も遅れて，現代語ではＮＡ語順のＨ－Ｄ（＝ＶＯ）型となっている。そして，現代フランス語では，最終的に，すべての主要語順パラメーターにおいて，揃ってＨ－Ｄ（＝ＶＯ）型の値が取られている。従って，これが，語順類型論的観点から捉えた，古フランス語から現代フランス語へ至る語順構造シフトの通時的方向性であり，全体として，各パラメーターをＨ－Ｄ（＝ＶＯ）型へ揃えようとするメカニズムが働いていたと言えよう。

最後に，今後の課題であるが，０．で示した（Ｉ）の観点，すなわち，平叙文と疑問文の構造上の変換を同じ語順構造の仕組みの中に含めた，ＳとＶに関する語順構造シフトの通時的方向性については，紙幅も尽きたので，次稿以降に譲りたい。

注

1) Comrie(1989²)，p.96 参照。
2) Comrie(1989²)，p.96 によれば，他にも，operand/operator，head/adjunct，head/modifierという対用語が挙がっており，Vennemann はoperand/operator「被操作子－操作子」を用いているが，本稿では，この対用語を用いることにしたい。
3) 接置詞(adposition)とは，前置詞(préposition) と後置詞(postposition)を包括する用語である(Comrie(1989²)，p.91 参照）。
4) この各主要語順パラメーターに関しては，Comrie(1989²)，p.98 を参考にした。
5) Comrie(1989²)，p.96 によれば，「まず，レーマンの主張では，主語の位置は一般的な類型論上の観点からは〔各主要語順パラメーター間の一般化とは（筆者補足）〕無関係とされ，ただＯＶとＶＯという２つの主要な型を対象とすれば十分であるという。」〔松本克己・山本秀樹訳(1992)による〕とされている。
6) 詳しくは，今田(2010b)，pp.23-24 を参照。
7) 詳しくは，今田(2002c)，pp.33-34; 35-36を参照。
8) 詳しくは，今田(2009)，p.6 を参照。
9) 同上。
10) 詳しくは，今田(2009)，p.7;今田(2011)，p.14を参照。
11) その他に，Ménard(1988³)，p.23 を参照。
12) Allières(1988²)，pp.102-103 を参照。
13) 詳しくは，今田(2009)，p.6 を参照。

参考文献

安藤貞雄(1987)：『英語の論理・日本語の論理 ― 対照言語学的研究 ― 』，大修館書店.

今田良信(1993):「古フランス語における文頭の補語要素と語順 — ＣＶＳ語順対ＣＳＶ語順を基準として —」,『ニダバ』, 22, pp. 80-91.
今田良信(1995):「古フランス語における文頭に従属節を有する複文の語順について」,『吉川守先生御退官記念言語学論文集』, 溪水社, pp. 31-45.
今田良信(1996):「古フランス語における文頭の補語と語順」,『ロマンス語研究』, 29, pp. 68-82.
今田良信(1998):「古フランス語における文の肯定／否定と語順 — 文頭に現れる若干の状況補語（句）とＣＶＳ／ＣＳＶ語順との関係について —」,『新村猛先生追悼論文集』, フランス図書, pp. 205-210.
今田良信(2002c):『古フランス語における語順研究 — 13世紀散文を資料体とした言語の体系と変化 —』, 溪水社.
今田良信(2009):「フランス語歴史言語類型論の試み」,『ニダバ』, 38, pp. 1-10.
今田良信(2010a):「フランス語における言語構造の変換 — 歴史言語類型論の視点から —」,『ニダバ』, 39, pp. 31-40.
今田良信(2010b):「歴史言語類型論的視点から見たフランス語の疑問文」,『ロマンス語研究』, 43, pp. 21-30.
今田良信(2011):「日本語・フランス語の諸相対照研究 — フランス語の特色を中心として —」,『ニダバ』, 40, pp. 10-19.
今田良信(2012b):「古フランス語と現代フランス語の間に見られる言語構造の変換」,『ロマンス語研究』, 45, 10p.〔刊行予定〕
古浦敏生(2008):『日本語・イタリア語対照研究』, 文流.
Allières, J. (1988²): *La formation de la langue française*, Paris: PUF.
Chaurand, J. (1987⁵): *Histoire de la langue française*, Paris: PUF.
Combettes, B. (1988): *Recherches sur l'ordre des éléments de la phrase en moyen français*, Thèse pour le Doctorat d'Etat (Université de Nancy)
Comrie, B. (1989²): *Language Universals and Linguistic Typology*, Oxford: Blackwell.〔松本克己・山本秀樹訳(1992):『言語普遍性と言語類型論』, ひつじ書房〕
Greenberg, J. H. (1966c²): *Universals of language*, Cambridge, Mass: MIT Press.
Lehmann, W. P. (1974): *Proto-Indo-European Syntax*, Austin.
Marchello-Nizia, Ch. (1995): *L'évolution du français: Ordre des mots, démonstratifs, accent tonique*, Paris: Armand Colin
Marchello-Nizia, Ch. (1999): *Le français en diachronie: douze siècles d'évolution*, Paris, OPHRYS.
Ménard, Ph. (1988³): *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux: Bière.
Perret, M. (1998): *Introduction à l'histoire de la langue française*, Paris: SEDES.